

氏名(本籍)	おか だ たか ゆき 岡 田 幸 之 (兵庫 県)		
学位の種類	博 士 (医 学)		
学位記番号	博 甲 第 1,423 号		
学位授与年月日	平 成 7 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当		
審査研究科	医 学 研 究 科		
学位論文題目	医師・患者間における情報伝達 —精神科医療での実証的研究—		
主 査	筑波大学教授	医学博士	白 石 博 康
副 査	筑波大学教授	医学博士	阿 部 帥
副 査	筑波大学教授	医学博士	柏 木 平 八 郎
副 査	筑波大学教授	医学博士	小 磯 謙 吉
副 査	筑波大学教授	医学博士	福 富 久 之

論 文 の 要 旨

〈目的〉

医師・患者間における情報伝達についてはインフォームド・コンセントの問題が近年、医療倫理学の領域でもっとも注目されている問題であるが、精神医療においても同様である。説明と同意の中でも医師から患者に対する情報伝達の側面、とくに病名の告知について精神分裂病の告知の問題をとりあげた。その理由は、精神分裂病は最も代表的な精神疾患であり、治療不能の病気であるという偏見が存在し、患者が病識を得ることが困難な障害であるなどの問題があるからである。精神分裂病をとりまく情報伝達について実証的・理論的研究を行い、それによって医師・患者間の情報伝達の望ましい在り方を探索したのが本論文の目的である。

〈対照と方法〉

1. 全国の国・公・私立医科系大学臨床精神科に属する全教授・助教授・講師、合計367名および全国の国・公・私立大学で民法・刑法を専門とする全教授・助教授・講師、合計593名を対象に、精神分裂病患者とその家族に病名を告知することの是非について、3項目からなる自記式調査票を郵送し、回答を求めた。
2. 関東地方の精神障害者家族の某互助団体の会員で、精神分裂病、躁うつ病、てんかん、神経症など多岐にわたる患者の家族を対象として2段階の調査を行った。一次調査は、上記家族会会員で、著者らの説明をうけて協力を承諾した200名の会員に、病名に関する調査票を配布した。二次調査は、一次調査で家族が「精神分裂病」という病名を与えられていた78例を対象に、病名とその告知につい

ての調査票を郵送しその返送を依頼して回答を得た。

3. 精神科単科で200床の私立病院に入院中で、DSM-Ⅲ-Rの診断基準により精神分裂病と診断され、単一主治医の担当患者28名を対象とした。情報の受手としての要因として、知能、精神症状の重症度、人格特性をそれぞれウェクスラー成人知能検査、BPRS、日本語版 Locus of Control Scale を用いて測定した。告知が患者の不安感に及ぼす影響を、特性不安尺度（STAI）を用いて告知・説明の1週間前と2週間後に測定した。告知・説明が患者の疾病感・偏見に及ぼす影響を、精神病偏見尺度、精神分裂病イメージ尺度により測定した。告知・説明が患者の受療態度に及ぼす影響を自己記入式質問票により、告知・説明の1週間前と2週間後に調査した。

4. 症例呈示：精神分裂病の病名告知が自殺の原因であるとして、遺族が告知したE医師を告訴している民事訴訟事例を提示した。前期1.の調査において、この症例を呈示して、その診断名や告知・説明についてのアンケート調査を同時に行った。

〈結果及び考察〉

1. 1) 精神科医師群と法律学者群による告知の是非の基準には相違がある。2) 精神科医師群と法律学者群ともに精神分裂病患者本人に対する告知の是非は見解に統一がみられない。3) 精神科医師群と法律学者群ともに、家族への告知は患者本人への告知より肯定する意見が多い。

2. 1) 家族は1年以内に精神分裂病告知を受けるほうが、それ以後に告知を受けるより、満足度が高い。2) 医療情報を利用する権利に関する情報よりも、治療システムの中での役割を果たすための情報を得ることの方が家族の高い満足度に関係する。3) 精神分裂病患者とその家族への病名の与えられる経路は非常に複雑である。

3. 1) 精神分裂病患者への告知・説明は、患者の不安を軽減し得る。2) 告知・説明によって精神分裂病という病名の受け入れ度が増し得る。3) 告知・説明によって患者自身のもつ精神分裂病に対する偏見を軽減し、患者の治療への態度は好ましい方向へ変化した。4) 内部統制群は外部統制群よりも、告知・説明による上記の効果が大きかった。

4. 呈示された症例に対する精神科医の回答は、精神分裂病（の疑い）が29.2%で最多であった。E医師が誤診をしていたと判断することはできないであろうが、疾病概念が十分統一されていない精神分裂病という病名を不用意に告知・説明することによる種々の問題点が1鑑定事例を通して検討された。

審 査 の 要 旨

本論文は、精神医学領域において最も重要な障害であり、難治性で偏見を持たれやすく、病識を得ることが困難な障害である精神分裂病を対象として、精神科医療におけるインフォームド・コンセント特に医師、患者間における情報伝達の面すなわち病名の告知・説明に焦点をあてた研究である。著者はアンケート調査により、精神科医師が精神分裂病の告知・説明に躊躇しており、患者家族は、早期に病名告知をうけることと治療システムの中での役割を果たすための情報を得ることに高い満足度

を有することなどを示した。また、慢性精神分裂病患者群を対象に、その病名を告知し、症状、疫学的知見、原因、治療などについて説明を行った結果、患者の不安は軽減し、患者は好ましい方向への反応を示すことを示したが、この良好な効果は人格特性検査（Locus of Control）によると内部統制群で外部統制群より高率であった。対象群はすべて慢性期入院患者であり、服薬はスタッフにより管理されているので、受療行動の変化が観察困難な点や、対照群の設定を欠くなどの問題はあるが、精神分裂病の病名告知に関する実証的研究が見当たらない現在、今後精神医療におけるインフォームド・コンセントの研究に資するものと評価される。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。